

Title	抑うつの原因帰属モデルに関する研究：生活事件と帰属スタイルの交互作用について
Sub Title	The study of causal attribution model of depression : interaction between life event and attributional style
Author	増田, 真也(Masuda, Shinya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1993
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.38 (1993.) ,p.51- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000038-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

抑うつの原因帰属モデルに関する研究

—生活事件と帰属スタイルの交互作用について—

The Study of Causal Attribution Model of Depression

—Interaction between Life Event and Attributional Style—

増 田 真 也*

Shinya Masuda

The diathesis-stress model of depression predicts that reactions to negative life events vary according to individual attribution tendencies, that is, people who display a generalized tendency to attribute negative outcomes to stable or global factors are more likely to experience a depressive mood reaction than people who typically attribute negative outcomes to unstable or specific factors. This study was conducted to examine whether the content of college students' attributional styles interacted with their real life events to predict states of depression. Results indicated a significant correlation between attributional styles and depressive moods. However, the interaction of attributional style and life events hardly explains the variance of depression scores. The implications of these findings and the research strategies necessary to test the diathesis-stress model of depression are discussed.

現代のようなストレスの多い社会においては、誰もが心理的健康を害する危険性を持っている。実際、精神科医、カウンセラーらによって、近年うつ病者の数が増加していることが指摘されている。うつ病は自殺を誘発することがあるため、精神疾患のなかでは数少ない死を伴うことのある病である。

近年、抑うつに関する「認知」の研究が注目を浴びており、多くの研究者が「認知」の問題に取り組んでいる。Alloy (1988) は、抑うつの認知研究が盛んになった理由として、次の4つを挙げている。

①少なくともある種のうつ病に対して、認知療法 (Beck, 1976) が有効であることが示されたため、抑うつの認知理論の臨床場面への応用が検討されるようになった。

②同じ時期の認知心理学と社会心理学の研究テーマの多くが重なっていた。

③抑うつの人が否定的な考え方をするだけでなく、現実を誤解し、歪曲しているという Beck の指摘が研究者の好奇心をそそった。

④経験的に検証可能であることが、研究者にとって魅力的なテーマであった。

抑うつの認知理論の主要なものとして、① Beck のスキーマ理論と ② Abramson *et al.* による絶望感理論 (hopelessness theory)、及びその前身にあたる学習性無力感の改訂モデル (reformulated model of learned helplessness theory: 以下改訂 LH) を挙げることができる。本研究の目的は、後者について検討し、問題点の検証を行うことである。

認知の役割が重視される以前は、Overmier & Seligman (1967) が提唱した学習性無力感理論 (learned helplessness theory) が抑うつに対する有力な理論であった。この理論では、結果をコントロールできないという期待が、動機づけの低下、認知の歪み、感情の障害を引き起こすと考えている。

しかしその後、学習性無力感理論に関して様々な問題点が指摘され、Abramson, Seligman, & Teasdale (1978) によって、理論の改訂が行われた。改訂 LH の主張は「人間における無力感の効果は、人が重大な負の結果をコントロールできないと知ったとき、それについ

* 社会学研究科社会学専攻博士課程 (健康心理学)

てなされる原因帰属によって媒介される」というものであった。彼らは、帰属の3つの次元(内的-外的, 安定的一変動的, 普遍的一特殊的)が抑うつ情動的, 動機, 認知的側面に影響を与えると考えた。つまり, 負の出来事の原因を自分に帰属するかどうか(内在性次元: internality)が, 自尊心の低下(low of self-esteem)の有無を決定し, 今後も持続するものと考えるか(安定性次元: stability)が, うつ症状が慢性化するかどうかを予測する。また負の出来事の原因が, 他の場面や領域に及ぶものであるかどうかの推測(普遍性次元: globality)は, うつ症状が場面の違いを越えて一般化するかどうかを予測するとしたのである。

抑うつ状態と直接関係するのは, 負の出来事の原因の安定的普遍的帰属である。しかしながら, 内的帰属は, 自尊感情と関係することで, 抑うつが悪化に貢献するとされる。また, Seligman, Abramson, & Semmel (1979)は, 良い出来事の原因を外的, 変動的, 特殊的要因に求めることが, 抑うつに対する脆弱さを増大させるとして, 改訂 LH 仮説の補足を行っている。

Abramson *et al.* (1978)は, 「人は出来事に対してある種の説明を選ぶ習慣的な傾向がある」と考え, それを「帰属スタイル(attributional style)」と名づけた。帰属スタイルには, 改訂 LH に基づいて内在性, 安定性, 普遍性の3つの次元がある。そして負の出来事に対する, 内的安定的普遍的帰属スタイルと正の出来事に対する外的変動的特殊的帰属スタイルが, 抑うつ危険因子であるとされている。

この帰属スタイルの測定のために, Seligman *et al.* (1979)は, ASQ (Attributional Style Questionnaire)を作成した。ASQは, 対人関係と課題達成に関する2種類の仮想場面を用いて, それぞれの領域における帰属スタイルを測定することができるようになっている。この尺度を用いた彼らの研究では, 抑うつ的な学生は, そうでない学生よりも, 負の出来事の原因を内的安定的普遍的に帰属する傾向が見られ, 改訂 LH は支持されるという結論を得た。

その後, 改訂 LH に関して, 多くの経験的研究がなされた。Peterson & Seligman (1984)は, 一連の研究のレビューから, 改訂 LH は支持されているという結論を出した。しかしながら, 彼らが寄りどころとする研究の多くは, 彼ら自身の手によるものである上, その中の論文には未公開のものが多く含まれている。したがって, 改訂 LH が支持されるとする結論には, 十分な根拠があるとは言えない。

改訂 LH に関する研究を概観すると, 次のような問題点を指摘できる。第一に, 理論に反する結果を得た研究が, 散見するという点である(Hammen & Cochran, 1981; Hammen & de Mayo, 1982; Miller, Klee, & Norman, 1982)。第二に, 理論を支持する結果を得ても, その内容にかなりのばらつきがみられるという点である。帰属の3次元すべてが, 抑うつと関係するという結果を得た研究は非常に少ないし(Seligman, Peterson, Kaslow, Tanenbaum, Alloy, & Abramson, 1984; Eaves & Rush, 1984), 一つあるいは二つの帰属次元が, 抑うつ傾向と有意に関係することが示されても, どの次元が有意な関係を得たかという点について, 一致した見解が得られていないのである(Barth & Hammen, 1981; Golin, Sweeney, & Shaeffer, 1981; Blaney, Behar, & Head, 1982; 村上, 1989; 桜井, 1991)。第三に, 帰属スタイルの測定尺度としての, ASQ の信頼性・妥当性が, 十分でないという指摘があることである(Miller *et al.*, 1982; Cutrona, Russell, & Jones, 1984)。第四に, 内在性次元と自尊心の関係について言及した研究が, 仮説を支持しなかったことである(Hammen & de Mayo, 1982; Brewin & Furnham, 1986)。

桜井(1989)は, 我が国におけるこの分野の経験的研究をレビューし, 「負の出来事に対する帰属スタイルが抑うつと関係するという結果を得た研究がほとんどない」ことを報告した。原因帰属を変容することで, 抑うつ感情を軽減したり, 自尊心を高揚させようとする心理療法的技法が, 近年発表されているが(Pope, McHale, & Craighead, 1988; 高野, 1989), こうした技法の根拠とされている改訂 LH は, 経験的に支持されているとは言えないのである。

改訂 LH 理論に対する批判や問題点に対し, こうした研究の多くは帰属スタイルだけを問題にしており, その他の要因を考慮していないとして, Abramson *et al.* (1988, 1989)は新たに絶望感理論を提案した。絶望感理論が改訂 LH と異なる点をまとめると, 次のようになる。

1) 性格的で一般的な場面に対する帰属スタイルと, 実際の出来事に対する帰属との区別が強調された。「絶望感(否定的な事態を予測し, しかもそれを統制できないという予期)」をもたらすのは, 負の生活事件の安定的普遍的な帰属であって, これは帰属スタイルと同時に, 状況手がかり(situational cues)によって規定される。

2) 負の生活体験が抑うつにとって重要である。したがって, 不適応的な帰属スタイルは, つねに抑うつを引

き起こすわけではない。不適応的な帰属スタイルをもった人でも負の出来事を体験しなければ、適応的な帰属スタイルをもった人同様、抑うつにならない。また、適応的なスタイルをもった人でも、出来事のインパクトが大きいと抑うつになることがある。もし、同じインパクトの出来事を体験したならば、不適応的なスタイルをもった人の方が、適応的なスタイルの人より抑うつは深刻化する。

このことはすなわち、Metalsky, Abramson, Seligman, Semmel, & Peterson (1982) が提唱した、素質-ストレス・モデル (diathesis-stress model) を強調するということである。("diathesis" とは、病気になるやすい体質、素質のことであり、負の出来事の原因を内的、安定的、普遍的に帰属するスタイルのことを指す。また、"stress" とは、日常生活で起こる様々な負の出来事のことを指す。) 素質-ストレス・モデルは、性格的な帰属スタイルと状況要因の交互作用こそが、抑うつ症状の原因となると考えている。

3) 絶望感とうつ病の十分原因 (sufficient cause) であるが、必要原因 (necessary cause) ではない。すなわち絶望感によらないうつ病もある。したがって絶望感によるうつ病は、うつ病の下位カテゴリーになるが、従来の疾患分類には完全に対応するものがなく、むしろ新しく絶望感うつ病という概念をつくる。

4) 改訂 LH では、自尊心の低下を決定するのは内在性次元であったが、絶望感理論では内在性、安定性、普遍性の3つの次元が必要とされる。

5) 原因帰属だけでなく、さらに推測された結果 (inferred consequences), 推測された自己の性格 (inferred characteristics about the self) の2つの推論も、抑うつの発生にあたって重視される。

6) 絶望感抑うつを引き起こす上で、負の出来事は統制不可能であることを必要としない。

改訂 LH に対する批判が、絶望感理論というさらなる改訂によって、解決できたかどうかは、今後明らかにされることである。しかしながら、原因帰属スタイルと抑うつ傾向に関する今後の研究には、いくつかのポイントがある。それは 1) 信頼性、妥当性の高い帰属スタイル尺度を使用すること、2) 原因帰属だけでなく、生活事件を考慮すること、3) 生活事件と帰属スタイルの交互作用に注目した研究、すなわち素質-ストレス・モデルに基づく研究が必要であることである。本研究は、以上の3点に留意した調査研究を行った。

調査研究

手続き

被調査者：大学生 103 名 (男性 31 名, 女性 72 名)。平均年齢は 19.96 歳 (標準偏差 .96) であった。教員の協力を得て、自らの手で、授業中に調査用紙を配布、回収した。

質問項目

1) 原因帰属スタイル測定尺度：村上 (1989) が作成した大学生用の帰属スタイル測定尺度を使用した (以下帰属スタイル尺度)。この尺度は、学業達成領域と対人関係領域について、仮定の成功場面と失敗場面を5つずつ設けており、内在性、安定性、普遍性、統制可能性次元について、7段階評定でその原因の程度を記入するようになっている。各5場面の得点を合計した領域別の帰属スタイル得点と、領域を区別しない領域合計帰属スタイル得点が算出される。今回は、内在性 (原因は) 自分にある一周囲にある)、安定性 (将来において続く一将来なくなる)、普遍性 (他の事にも影響する一こうした問題に限られる) の3次元について回答を求めた。また、3つの次元に加えて、改訂 LH の仮説から、安定性次元と普遍性次元を加算した帰属スタイル得点も算出して、分析に用いた。

2) 短縮版 Beck うつ病評定法 (Shortened Beck Depression Inventory: 以下 S-BDI): Beck, & Beck (1972) が作成した13項目の抑うつ尺度である。抑うつ尺度として妥当性、信頼性が高いことが確認されている日本語訳は、溝口 (1985) を参考にしたが、今回の対象者が、大学生であるため、「仕事の遅滞」という項目は「勉強の進み具合」にし、合わせて選択肢の用語も「仕事」から「勉強」に変更した。S-BDI は13項目からなり、各項目は4つの文章の中から自分の気持ちに近いものを1つ選ぶようになっている。選ばれた文章は、抑うつ程度の高いものから、3, 2, 1, 0 点が加算されるようになっているが、今回は標準化得点を算出して加算して用いた。

3) 大学生生活体験尺度 (College Life Experience Scale: CLES): 久田, 丹羽 (1987) が作成した大学生用生活体験尺度から、体験率の高い44項目について回答を求めた。本研究では、体験があり、かつ Negative (とても悪い、悪かった、どちらかという悪い) であると答えた項目の個数をストレス得点として用いた (以下 NE 得点)。またこの中から、対人状況で生じる出来事と課題達成場面で生じる出来事を選び、それぞれ対人事件

表 1 対人関係及び課題達成事件項目の内容

対人関係事件	1) 新しい環境, 人間関係に加入した
	2) 友人から批判されたり, からかわれた
	3) 仲間の話題についていけなかった
	4) 他人から誤解された
	5) 友人の悩みやトラブルに関わった
	6) 信頼していた友人, 先輩に裏切られた
課題達成事件	1) 成績が低下した
	2) 課題が大変な授業を受けるようになった
	3) 留年した
	4) 学業上の努力が先生や仲間になされた
	5) 必修科目の単位を落した
	6) 自分の勉強, 研究, 卒業などがうまくすすまない

得点, 課題事件得点とした (表 1)。

さらに, 体験した生活事件の中から, 最も重要な出来事の一つを選んでもらい, 帰属スタイル項目と同じ形式でその原因の内在性, 安定性, 普遍性について尋ねた。

結 果

まず, 帰属スタイル尺度の信頼性について検討した。各領域別次元別合計得点の α 係数は, .66~.86 であった。したがって, 帰属スタイル尺度の信頼性は十分に高いと判断できる。また, 抑うつ度を測定した S-BDI の α 係数は, .82 となり, こちらも十分に高い信頼性の推定値を得た。

帰属スタイル得点と S-BDI の単純相関係数を表 2 に示す。課題成功事態の内在性, 対人失敗事態の普遍性, 課題失敗事態での安定性, 普遍性次元で, 帰属スタイル得点と S-BDI との間に, 有意な相関係数が得られた。また, 対人領域と課題領域を区別しないで算出した, 領域合計得点においては, 成功事態における内在性次元と失敗事態における普遍性次元で, 有意な結果が得られた。安定性次元と普遍性次元を合計した帰属スタイル得点では, 失敗事態においてのみ, 抑うつ度との有意な関連が見られた。

次に, NE 得点と対人事件得点, 課題事件得点の平均値, 標準偏差, クーダー・リチャードソンの公式 20 による α 係数, 抑うつ得点との相関係数を表 3 に示す。NE 得点に関しては, ほぼ満足できる信頼性の推定値を得たが, 項目数の少ない対人事件得点, 課題事件得点の α 係数は .50 程度であり, 信頼性がやや低い。しかしながら, 3 変数とも抑うつ得点と有意な相関を得た。

表 2, 表 3 より, 帰属スタイルと生活事件は, ある程

表 2 負の仮説事態に対する帰属スタイル得点と抑うつ度得点の相関

領域	帰属次元	内在性	安定性	普遍性	安定性+普遍性
対人領域	成功	-.07	-.07	.07	.00
	失敗	-.02	.14	.20*	.21*
課題領域	成功	-.27**	-.09	.07	-.02
	失敗	-.10	.19*	.20*	.24*
合計	成功	-.22*	-.09	.06	-.02
	失敗	-.07	.19	.25*	.26**

なお, 文中の記号 *, **, *** は, それぞれ, 5%, 1%, 0.1% 水準で有意であることを示す。

表 3 CLES 尺度の平均値, 標準偏差, α 係数

	平均値 (標準偏差)	α 係数	相関係数
NE 得点	6.39 (3.89)	.77	.36***
対人事件得点	.92 (1.10)	.54	.41***
課題事件得点	.92 (1.01)	.50	.31***

度 S-BDI 得点を予測することが確認された。そこで次に, 素質-ストレス・モデルの検討のために, 階層的重回帰分析を行った。

まず, NE 得点と, 領域合計帰属スタイルの抑うつ度への効果を検討した。理論では, 帰属スタイルと負の出来事の交互作用が強調されている。そこで, 安定性と普遍性を合計した領域合計帰属スタイル得点と NE 得点を標準化した値を掛け合わせた積を求め, これを交互作用と考え, 階層的重回帰分析を利用してその効果を検討した (表 4)。対人事件, 課題事件に関しても同様の方法で, 生活事件得点と帰属スタイルの交互作用変数を作成して, 分析を行った (表 5, 表 6)。これらは, 1) 生活事件の影響を統制した帰属スタイル独自の効果を検出し, 2) 交互作用の効果を適切に解釈できるようにするため, 生活事件, 帰属スタイル, 交互作用の順で変数の投入を行った。

表 4 を見ると, NE 得点だけで抑うつ得点の分散の約 13% を予測することができる。第 2 ステップでスタイルを投入すると決定係数はやや増加したが, 統計的には有意ではなかった。また, 交互作用の効果はほとんど見られなかった。

表 5, 表 6 を見ると, 対人事件の方が抑うつとの関連が大きかった。しかし, 帰属スタイル, 交互作用の効果

表 4 階層的重回帰分析による NE 得点と帰属スタイルの交互作用の効果

ステップ	投入変数	決定係数	決定係数の増加量	F 値	確率
1	NE 得点	.133	—	15.467	.000
2	領域合計帰属スタイル	.161	.0283	.338	.071
3	NE 得点×帰属スタイル	.172	.0091	.384	.242

表 5 対人事件に関する階層的重回帰分析

ステップ	投入変数	決定係数	決定係数の増加量	F 値	確率
1	対人事件得点	.171	—	20.784	.000
2	対人場面帰属スタイル	.177	.006	.370	.370
3	対人事件×帰属スタイル	.180	.003	.347	.557

表 6 課題事件に関する階層的重回帰分析

ステップ	投入変数	決定係数	決定係数の増加量	F 値	確率
1	課題事件得点	.096	—	10.774	.001
2	課題場面帰属スタイル	.129	.033	3.777	.055
3	課題事件×帰属スタイル	.134	.005	.545	.462

は小さく、統計的に有意ではなかった。課題達成領域では、帰属スタイルの投入により決定係数はやや増加したが、5%の有意水準にわずかに達しなかった。交互作用による効果は、やはり見られなかった。以上の結果は、生活事件と帰属スタイルの交互作用は、ストレス事件とスタイルを統制すると抑うつをほとんど説明しないということを示している。Metalsky *et al.* (1982) が提唱した素質—ストレス・モデルは、学習性無力感の改訂モデルを精緻化することを目的としていたが、今回の結果はモデルを支持しなかった。

考 察

帰属スタイルと抑うつ度の間には、いくつか有意な相関が得られた。まず、対人領域、課題領域の失敗事態で、安定性と普遍性の合計得点が抑うつ度と正の相関を示した。この結果は、抑うつの原因帰属モデルの仮説を支持している。しかし、成功事態の普遍性次元においては、有意ではないものの正の相関が見られ、仮説に反する結果も得られた。なお、課題成功事態では、内在性次元で高い相関が得られたが、桜井 (1989) が指摘する「我が国では成功事態でのみ有意な関連が見られる」という傾向は、今回は見られなかった。

一方、負の生活事件得点も抑うつ度と強い関係を示した。-.36 という相関係数の値は、どの帰属スタイル得点よりも値が大きく、スタイルより生活事件のほうが、抑うつとの結びつきが強いことがわかる。

この生活事件の影響を統制したうえで、原因帰属が抑うつへの予測に貢献するかどうか、研究の1つのポイントであった。結果的には、課題達成領域では、帰属スタイル変数の投入により、決定係数がやや増加した。したがって、原因帰属の媒介は考えられるところであるが、生活事件を考慮した上での影響は非常に小さいということになる。実際のところ、予測だけを考えるなら、負の生活事件得点だけを捉える方が効率が良い。

さらに、抑うつへの素質—ストレス・モデルに基づき、帰属スタイルと生活事件の交互作用の効果を検討した。すると、表 4、表 5、表 6 のいずれにおいても決定係数はほとんど増加せず、モデルは支持されなかった。素質—ストレス・モデルは、帰属スタイルの単独の効果ではなく、交互作用を強調するものである。したがって、以上の結果はモデルを否定していることになる。

今回の研究では素質—ストレス・モデルに支持的な証拠は得られなかった。その1つの理由として、使用された帰属スタイル尺度に問題があるという可能性が考えられる。この点についてまず、信頼性係数を確認したところ、ほぼ満足できる値が得られた。

次に妥当性の問題について検討するために、被調査者に、体験した生活事件の中から、最も重要な出来事の一つを選んでもらい、帰属スタイル項目と同じ形式で、その原因を尋ねた。するとその出来事について、35人がPositiveな出来事と評価し、55人がNegativeなものと考えていた。このNegativeな評価をした55人を対

象に、生活事件の原因帰属の仕方と帰属スタイル得点との関連を調べた。

この最も重要で Negative な出来事は、必ずしも対人関係領域と課題達成領域の 2 つに、明確に区別できるものばかりではない。そこで、失敗事態の領域合計得点を用いて相関係数を算出した。その結果、3 つの次元すべてで有意な相関係数が得られた (内在性 .30*, 安定性 .29*, 普遍性 .56***)。ASQ に関する信頼性・妥当性の検討を行った Cutrona *et al.* (1984) は、ASQ が実際の出来事に対する原因帰属をほとんど予測することができないことを理由に、帰属スタイルの妥当性について否定的な結論を下した。しかし今回使用した帰属スタイル尺度は、実際の帰属の仕方をよく予測しており、尺度の内容の妥当性は確保されているものと考えられる。

今回使用した帰属スタイル尺度 (村上, 1989) は、ASQ について指摘されていた信頼性・妥当性の問題をクリアしている。村上が作成した帰属スタイル尺度と ASQ の違いは 2 点ある。1 つは ASQ が一般の人々を対象にしたのに対して、村上版帰属スタイル尺度は、大学生だけを対象にしていることである。2 番目に、ASQ が一般の人々が体験しうる生活上の様々な仮設場面からなるのに対して、村上版は大学生を対象にしているため学習場面や試験場面、そして友人関係に関する事柄に限られているという点である。つまり、村上版は限定的で汎用性に乏しいが、そのためかなり精緻にスタイルを測定することが可能になり、高い信頼性・妥当性が得られたものと考えられるのである。しかし逆に言えば、このことは帰属スタイルが場面限定的であり、一般的な人々を対象にした尺度を開発したり、利用したりすることが困難であることを示している。

なお、生活事件に対する実際の帰属と抑うつ得点との間にも、内在性次元と普遍性次元で有意な相関が得られた (.29*, .35**)。しかし、最も重要な出来事として、負の事件を選んだ被験者は 55 人だけであり、データが少なかつたため、今回はこうした点について十分に検討することができなかった。今後は、実際に経験した複数個の出来事について回答を求め、生活事件に対してなされた原因帰属についても、詳細に検討する必要があるだろう。

ところで、対人事件得点は、NE 得点や課題事件得点より、抑うつ得点との相関係数が高かった。したがって、対人関係における出来事の方が、生活上の他の領域の出来事よりも抑うつ症状に対するインパクトが大きいと考えられる。この結果は、生活事件の測定に関して、生活

の全領域にわたるストレスラーが、測定されなければならないということだけでなく、ストレスラーの種類について、正確な分類がなされなければならないということを示している。また項目数が少ないこともあって、対人事件得点、課題事件得点の α 係数は低いものであった。内的一貫性が高くなると、階層的重回帰分析における決定係数が、今回得られた値よりも大きくなる可能性がある。逆に、帰属スタイル、交互作用の決定係数が小さくなることも考えられる。モデルの検討のためには、より洗練された生活事件尺度が必要であり、今後の研究での使用が望まれる。

引用文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. (1978) Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, 87, 49-74.
- Abramson, L. Y. (Ed.) (1988) *Social cognition and clinical psychology: A synthesis*. New York: Guilford.
- Abramson, L. Y., Alloy, L. B., & Metalsky, G. I. (1989) Hopelessness depression: A theory-based subtype of depression. *Psychological Review*, 96, 358-372.
- Alloy, L. B. (1988) *Cognitive processes in depression*. Guilford Press.
- Barthe, D., & Hammen, C. (1981) The attributional model of depression: A naturalistic extension. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 7, 53-58.
- Beck, A. T., & Beck, R. W. (1972) Screening depressed patients in family practice: A rapid technique. *Post-graduate Medicine*, 52, 81-85.
- Beck, A. T. (1976) *Cognitive therapy and the emotional disorders*. International Universities Press, New York. (大野 裕訳「認知療法」岩崎学術出版)
- Blaney, P. H., Behar, V., & Head, R. (1980) Two measures of depressive cognitions: Their association with depression and with each other. *Journal of Abnormal Psychology*, 89, 678-682.
- Brewin, C. R., & Furnham, A. (1986) Attributional versus preattributional variables in self-esteem and depression: A comparison and test of learned helplessness theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1013-1020.
- Cutrona, C. E., Russell, D., & Jones, R. D. (1984) Crosssituational consistency in causal attribution: Does attributional style exist?. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1043-1058.

- Eaves, G., & Rush, A. J. (1984) Cognitive patterns in symptomatic and remitted unipolar major depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 31-40.
- Golin, S., Sweeney, P. D., & Shaeffer, D. E. (1981) The causality of causal attributions in depression: A cross-lagged panel correlational analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, 90, 17-22.
- Hammen, C., & Cochran, S. D. (1981) Cognitive correlates of life stress and depression in college students. *Journal of Abnormal Psychology*, 90, 23-27.
- Hammen, C., & de Mayo, R. (1982) Cognitive correlates of teacher stress and depressive symptoms: Implications for attributional models of depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 91, 96-101.
- 久田 満, 丹羽郁夫 (1987) 大学生の生活ストレス-測定に関する研究 -大学生用生活体験尺度の作成-. 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 27, 45-55.
- Metalsky, G. L., Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., Semmel, A., & Peterson, C. (1982) Attribution style and life events in the classroom: Vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 612-617.
- Miller, I. W., Klee, S. H., & Norman, W. H. (1982) Depressed and nondepressed inpatients' cognitions of hypothetical events, experimental tasks, and stressful life events. *Journal of Abnormal Psychology*, 91, 7-81.
- 溝口純二 (1985) 心理テストからみた躁うつ病. 精神科. MOOK, 10, 163-171.
- 村上裕恵 (1989) 状況の変化に伴う帰属様式の変化に関する実験的研究. 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 29, 25-32.
- Overmier, J. B., & Seligman, M. E. P. (1967) Effects of inescapable shock upon subsequent escape and avoidance responding. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 63, 28-33.
- Peterson, C., & Seligman, M. E. P. (1984) Causal explanations as a risk factor for depression: Theory and evidence. *Psychological Review*, 91, 347-374.
- Pope, A. W., McHale, S. M., & Craighead, W. E. (1988) Self-esteem enhancement with children and adolescents. Pergamon Press. (高山 巖 (監訳) (1992) 『自尊心の発達と認知行動療法—子どもの自信・自立・自主性をたかめる—』岩崎学術出版社)
- 桜井茂男 (1989) 学習性無力感 (LH) 理論の研究動向—わが国の研究を中心に—. 日本心理学会第 53 回大会論文集, 1.1.
- 桜井茂男 (1991) 児童における抑うつ傾向と原因帰属様式の関係. 健康心理学研究, 4, 23-30.
- Seligman, M. E. P., Abramson, L. Y., & Semmel, A. (1979) Depressive attributional style. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 242-247.
- Seligman, M. E. P., Abramson, L. Y., & Alloy, L. B. (1984) Attributional style and depressive symptoms among children. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 235-238.
- Seligman, M. E. P., Peterson, C., Kaslow, N., Tanenbaum, R. L., Alloy, L. B., & Abramson, L. Y. (1984) Attributional style and depressive symptoms among children. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 235-238.
- 高野清純 (1989) 講座サイコセラピー 第 5 巻 帰属療法 日本文化科学社.